http://www.naniwa-rojo.com/

なにわ路情

野宿考ジャーナル
18号（季刊）

「なにわ路情」がめざすもの

- 野宿生活者の生活や声をとりあげ、ともに考える新聞です。
- 脱野宿のきっかけとなるような紙面づくりを心がけています。
- 今までのこと、そしてこれからのこと、いっしょに考えていきませんか。

寒中お見舞い申し上げます　知こそ！

全国調査のご報告です

いつも「なにわ路情」を読んでいただきありがとうございます。新年号をお届けしました。今年も「なにわ路情」をよろしくお願いいたします。

前一七号紙上で、ホームレス全国調査」協力のお願いをしました。皆さん宅におじゃまし、ご迷惑をおかけしました。おかげさまで多くの聞き取りが出来ました。あらためてお礼を申し上げます。昨年始まった調査ですが、全国のとくに都心部に暮らす人たちが数多くいます。今号は、北海道と沖縄の状況の一部をお知らせしたいと思います。また四面に別記者の調査レポートも掲載しています。

■北海道札幌市内の聞き取り現場から

一二月二日午後六時の札幌。気温四度で積雪は四～五センチほど。市内にはおよそ一〇〇人ほどの野宿者がいる。大通公園さっぽろテレビ塔横の市民会館での炊き出しもセットにした相談会が始まった。野宿者六〇名ほどが三々五々集まってくる。生活保護者もいる。女性はその一割強だ。主催は司法書士支援グループを中心に、教員、大学生のサークル、クリスチャン、ボランティアの青年たちだ。

「借金」をテーマとした寸劇を司法書士自らが演じ問題点を投げかけ、理髪師の出張散髪が賑わいを見せていた。長髪の男たちの頭が軽くなり、さっぱりした表情になって戻ってくる。広い会場の窓外は次第に雪が降り積もり、気温が下がり始めるけれど、部屋は、たくさんの当事者、支援者、我々調査員たちの体温を感じるくらいに暖かかった。

食事やアトラクションなどが終わり一段落したころ、調査員六名が聞き取りを始める。それぞれ平均二名の聞き取りが出来た。北海道の特色だが、気候の厳しい場所柄から当然テント生活者はほとんどなく、空調設備のあるビルや地下街、地下鉄階段などを拠点に暮らす人たちが多い。聞き取りをしたAさんは関東の出身で、仕事を探しながら北へと流れ今は札幌に定着している。身体は頑強で、仕事への意欲も見せているが、どこかで自分を捨てている様子である。それは、どこまで行っても出口の見えない野宿の現状と自らのふがいなさを責め苦しんでいる姿と見えてしまう。

翌日は、借入れ住宅を拠点に生活保護を勧める支援団体の経営するアパートで聞き取りを行った。生活保護で「暮らしの拠点」を手に入れたのかといえば、生きがい、単身の孤独、アパート経費の負担など、我々が大阪で接する同様の問題がここにもある。野宿後の生活がやはり“ホームレス”になる可能性があるのだ。北海道の取り組みでは、それぞれの持ち場・得意技を動機に、支援活動を続けている人たちの現況が見えた。

■沖縄県那覇市の聞き取り現場から

一二月一〇日午前一〇時過ぎの那覇市。雲はあるが晴れ。すこし汗ばむほどの天候。支援団体であるAキリスト教会が教会内で主催する炊き出しに向かう。この教会は、野宿者に宿泊所として提供をし、仕事づくりもしていた。また、市内各所にあるコンビニなどと提携し店外にドラム缶を設置、捨てられた空き缶を収集するK団体の取り組み、ユニークな野宿者支援基金づくりをしている。

ミサがすんだ後、炊き出しのカレーが配膳された。我々七名の調査員もカレーを頂き、聞き取りを開始した。聞き取りをしたBさんは五〇歳代で、決まった場所を持たず那覇周辺を移動して炊き出しには現れる。しかも妻や子どもと一緒に行動している。仕事への意欲はあまり見えず、といって生活保護などにもそれほど関心なく、人が集まる歓楽街に家族と一緒に行くのが楽しいと言っている。アンケートなど調査の数値に現れにくい人たちだ。何かの基準に当てはめるとスルリと抜け落ちていくような人たち。

気候温暖な沖縄はテント生活者はそれほど多くなく、墓地・沖縄は墓を大切にし、家族の墓以外に一族の「門中（ムンチュー）墓」を作るため巨大なものが多い。門構えやほこらがあり死者の家のよう）に起居する人たちもいる。教会を後に、浦添市内にある土木建築企業を尋ねた。ここには元野宿者で当教会から推薦されたBさんが雇用されている。Bさんの仕事への貢献とは別に、私的にブレスレットやネックレスなど装飾品を作るのが得意だと言う。女性にあげると喜ばれます。彼女にもあげました」。なるほど。Bさんの技術は、これからも恋を養う大切な道具になるのだろう。

この日夕刻の余儀公園や、翌日の松山公園やテントのある若狭公園での聞き取りもあるが紙数が尽きた。関東から来たC君は家庭問題のわずらわしさで南へ流れてきた。北海道のAさんとは逆方向といえるが、二人の気持ちはどこかなく共通していて今も記憶に残る。

〇七・一・二　くらし応援室佐々木敏明

（一段目）元旅館が福祉アパートに変身（札幌市）（二段目）市民会館内の相談会兼炊出しの光景（札幌市）（三段目）公園での配食風景、雑が野宿生活を送っているかは一見ではわからない（那覇市）（四段目）Bさんの寝泊りする住み込みスペース。工場に隣接（沖縄市）

紙面

1	寒中見舞い申し上げます　全国調査のご報告です	3	ひとくちギャラリー
2	路上から路情へ　川崎からのレポート①	4	全国行脚レポート、岐阜・鹿児島・高崎篇
2-3	連載（第四回）：路上から路情へ　振り返り今思う PART3	4	マンガ「ナナコロビヤオキな人々」
3	虹の連合、ホームレス全国調査　中間速報	4	編集後記

発行元
なにわ路情編集局
〒530-8090　大阪中央郵便局留
「なにわ路情編集局」係
tel　080-3767-7989
e-mail　rojoinfo@zap.att.ne.jp
http://www.naniwa-rojo.com/
郵便振替口座番号
00900-5-222740　なにわ路情編集局

全国行脚レポート

岐阜・鹿児島・高崎篇

昨年から全国各地を調査で訪ね歩きました。その中で印象に残った地域をいくつかをご紹介します。

一〇月下旬　岐阜にて

岐阜では教会が中心となり野宿者の支援を行っています。教会にお邪魔したときは、ちょうど炊き出しで配布する衣服の仕分け作業を支援者の方々が行っていました。かなり大量にあり、いくつもの衣装ケースが並んでいる教会。

その衣服を配る炊き出し、規模は、これまで見た中で最大規模の衣服配布で、ちょっとびっくり。まず、くじを引く順番を決め、その順番で衣服を受け取る順番を決めるというスタイルでした。次々に配られていく衣服、それぞれ自分にあったサイズ、現在必要な種類を選べるという感じです。炊き出し後のミーティングでも、「サイズの肌着が足りない」とか「男性物の冬用のシャツが無いかと聞かれた」など、野宿者が必要としていると感じられるものを、それぞれが出し合い、次の機会には用意できるようにがんばりましょう」と牧師さんは、おっしゃっていました。

一一月中旬　鹿児島にて

鹿児島には約八〇人の野宿者がいて、二つの団体が密接に協力し合って支援を行っています。そのうちのひとつの代表格で、当事者が中心になって、脱野宿後の居住支援をしている、ご本人も野宿を経験されたMさんにお話を伺うことが出来ました。Mさんはこれまで、何人もの野宿者をアパートに上げておられる方で、その次の日も二人、保護許可がおりる見通しだということを聞きました。結局、調査を行った三日間のうちに五人もの保護がおりてました。

他の地域と大きく違うと感じたのは、鹿児島では、野宿者に現在地保護をしてくれるということ。申請書に書く住所が、“鹿児島市●●町××橋たもと”でもOKということです。そのためなのか、野宿者が多い場所の住所を書き込んである申請書が、あるとかないとか。

しかし、実際に野宿をしている方にお話を伺うと、生活保護は考えていない、だめだろう」とのこと。最後の一歩が踏み出せない様子でした。

一二月上旬　高崎にて

高崎市では、Yさんという一般の方が中心となり、教会の関係者のバックアップを得ながら、支援が行なわれています。教会で現在はアパートで生活している元野宿の方にお話を伺いました。その中で記憶に残っているのが、自分が野宿をして困っているときに、やさしくして助けてもらったから、今度は自分の番」そんなに出来ないけど、自分の出来ることをやって返していきたい」という言葉でした。実際に、炊き出しの準備のほか、教会でボランティアとして働いておられます。また、仲間どおしの繋がりが強く、野宿をしているときはもちろん畳の上に上がってからも、野宿仲間を助けています。

さて、他の地域ではまったく見なかった農業をする野宿者がいます。高齢になった農家から農地を借りて農作物を作ったり、ご本人曰く役所から河川敷を借りて農業をして生活をしている野宿者の方がおられました。農地を休耕地のまま放置すると税金が高くなるため、貸しているのだとか。食料を自分達で作れということで貸しているのでしょうか？そうであればほほえましいですね…。（い）

（一段目）人材と活動の拠点である、バプテスト教会（岐阜市）（二段目）市内の公園の炊出し風景（鹿児島市）（三段目）拠点となるカトリック教会（高崎市）

THE BIG ISSUE JAPAN ビッグイシュー日本版

ホームレスの仕事をつくり自立を応援する、ビッグイシュー日本です。
雑誌販売に興味ある方は下記までお問合せ下さい。

■連絡先：
06－6344－2260
■住所：
大阪市北区堂島2-3-2堂北ビル４Ｆ

b. mixes
BIKOH
Industry Corporation
http://www.bikoh.biz
就労支援をNICEと協働に応援します

ナナコロビヤオキな人々

by ありむら潜

■編集協力　有）a-vèbè（アンビジブル）http://www.a-vèbè.net/・有）地域・研究アシスト事務所 http://www.cr-assist.net/

編集後記

一八号・二〇〇七年新年号をお届けいたします。前号でお知らせしました全国調査では、編集スタッフも調査員として全国を飛び回り、その様子を紙面にて報告させていただきました。各都市で様々な施策や工夫がなされており、とても勉強になりました。全国各地で調査が行われておりますが、それらを通じて少しでも状況が改善をすればと思っております。

次号以降、脱野宿をされた方々の「仕事」や「生き甲斐」について寄稿をいただく予定です。当事者の声を発信することで脱野宿後の生活を考える一助となればと考えております。

やまにしまいの 川崎通い①

報告　やまにし　まい

■資格を取る

俺たちのやっている活動を見てひとりでも多くの野宿生活者が希望を持てるなら…。」川崎市で活動を行っているＮＰＯ法人 川崎水曜パトロールの会」の萬谷茂之さん（五四歳）はこう語る。野宿生活を経験した後、肺がんで入院、居宅生活に移行した。この間、色々なひとに支えられて生活をし、この経験からヘルパー二級の資格を取ろうと決意したのだと言う。わたしが川崎を訪問したとき、萬谷さんの机の上には、ヘルパー２級の資格をとるための、たくさんの本が積み重ねられていた。

勉強、がんばってるんだね。」と声をかけると、少し照れながら、専門用語がたくさんあって、覚えにくいんだよ。歳のせいで覚えも悪くなってさ。でも、覚えなきゃね。」と。次に訪問したときには、しっかり試験に合格し、ヘルパーとして働いていた。「こういう仕事はね、専門用語が新しくたくさん出てきて、いつも新しいことを覚えなきゃならないんだよ。ＡＤＬって知ってる？」と質問されて、それはね、日常生活動作っていってね、ひとが生活をするうえで基本的に行う動作のことなんだよ。」と教えてくれた。毎日がいつも勉強だよ。」と言う。同時に、川崎の一時宿泊所 駅シェルター）である愛生寮の協力員として野宿生活者の相談業務も行う。

■仲間への家庭訪問

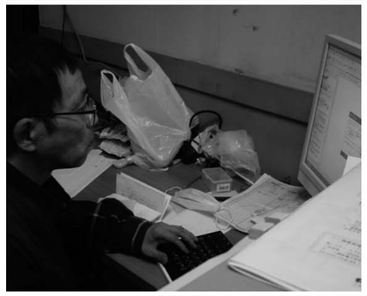
さらに、一番大事なことも行っている。それは、簡易宿所で居宅生活をしているひとたちへの訪問である。萬谷さん自身、居宅生活に移行した初期の頃、不安にかられ、ストレスもあって、部屋にこもるという生活が続いたという。その経験から、自ずと生活保護を受けながら簡易宿所で生活をしているひとの訪問を行うようになった。

簡易宿所での孤独な生活はアルコール依存を引き起こしたり、最悪の場合、孤独死にまで至ってしまう可能性もある。家族と縁が切れているひとが多いから、ひとりだって思っちゃうんだよね。」、少しでも誰かと話をすることで、ひとりじゃないんだとわかってもらいたい。」と。さらに、今ね、パソコンを覚えようと思って勉強してるんだ。」新しいことにどんどん挑戦している。ゆくゆくは、社会福祉士の資格を取りたいんだ。」とちょっと照れ笑いをしながら教えてくれた。

■ひとりぼっちではない

ひとりだということは、どれだけの寂しさを感じるのだろうか。わたしは経験したことがないからわからないが、想像しただけでもぞっとする。野宿生活者は、自分ひとりだという想いが強い。 川崎水曜パトロールの会」は、その名の通りパトロールを行いながら野宿生活者への声かけを行うことから始まった。 野宿生活を経験したから、俺たちはその気持ちが一番わかるんだよ。」

野宿を脱却し、支援活動を行うこの強みは、わたしたちが行う支援とは格段の差があるだろう。こうして第二の人生を歩み、野宿生活者へ希望を与えるひとたちが川崎にはまだまだたくさんいるのである。



（一段目）貝塚ホール近くの簡易宿所
（二段目）パソコンに向かう萬谷さん
（三段目昼食風景　貝塚ホールにて

●連載　路上から路情へ（第４回）

振り返り今思う PART3

永山渡（ペンネーム）

振り返り今思うを過去二回書かせていただき読まれた方の中には、何を勝手な事をと思われた方もいると思います。あくまでも路上生活者を正当化するつもりもありませんし僕の考えが正しいとも思っていません。ただ素直に感じたままを書かせて頂きました。今回は、僕自身の事も少し書いてみようと思います。

現在僕は約九年前に患ったパニック障害が再発し生活保護を受けています。今も路上で生活を余儀なくされている方にしてみれば、生保が受けられている時点で僕は、恵まれていると思われる事でしょう。しかしまだ三十代の僕は焦りでいっぱいでした。今の自分は皆様の税金で生かされているわけですから、早く職に就いて本当の意味での社会復帰を果たさなければならないと感じていました。理想を言えば病気を完全に治してから就職活動をしたいところですが、パニック障害は目に見えて分かる病ではない為、側から見ると生保で楽して生きていると思われても仕方ないと感じています。個人的に人は、体験した事や目で見える事しか理解が難しいと思っています。

このあたりは路上生活者が理解をなかなか得られないのと同じだと思います。僕自身も何か行動（就職活動）をしていなければ、ただ生保で生かされているだけの生きる屍になってしまう、今の世の中ワーキングプアやお年よりも健康をお金で買わなければならない時代に三十代で生保は、どこか許されない悪い事の様に感じて焦ってばかりいました。しかし最近、無理をし過ぎたのか分かりませんが、外出中に不安発作が起こり、過呼吸を起こすてまえで警察署に駆け込み、少し休ませてもらい部屋まで送って頂きました。幸いな事にこの時は、パニック障害を知っている方がいたので助かりました。僕の勝手な解釈や言い訳だと思いますが、無理をする事と努力する事は違うし、結果で判断される現在でも、自分はまだ、途中であって結果が出るのはまだ先だと思う様にしました。これまでは正直、捨て鉢になる事が多々ありました。常識と思われている事にとらわれて、焦っても何事も上手くいかない気がしました。

今までも何度も書いた様に僕には、学もなければ知識もありません。しかし最近思うのですが、開き直りかもしれませんが、現在の価値観などは正しいのでしょうか。路上生活者や障害者など弱者と言われる方が生き難い世の中で本当に良いのでしょうか。もっと皆が色々と暗中模索しながら価値観など創っていかなければ、今以上に皆が自分の事だけで精一杯で他人の事を思い遣る事が出来なくなっていく気がします。僕自身、無責任ですけど個人的にどの様にすれば良いのか術が分かりません。ただこの様に色々な事を考える様になれたのは、路上生活を経験した事が大きいと思います。

虹の連合、ホームレス全国調査　中間速報

全国、北は旭川から、南は那覇まで、取材、調査を行ないました。

一月一五日現在で、訪問都市は旭川、札幌、函館、盛岡、仙台、新潟、高崎、市川、千葉、さいたま、東京二三区、八王子、三多摩各市、川崎、横浜、湘南各市、静岡、浜松、名古屋、岐阜、大津、京都、大阪、尼崎、神戸、和歌山、岡山、福山、広島、徳島、高松、松山、北九州、福岡、久留米、熊本、大分、鹿児島、那覇です。

畳の上にあがった脱野宿の方、約六〇〇名、野宿生活の方、約一三〇名ほどにインタビューをおこなっています。

野宿生活非経験の人も一二％いました。

脱野宿の経路で、トップは、野宿から直接畳の上へ、が二二％、その次が自立支援センター経由で一七％、などとなっています。公的セクター経由が四割という感じでしょうか。

◆グラフ１

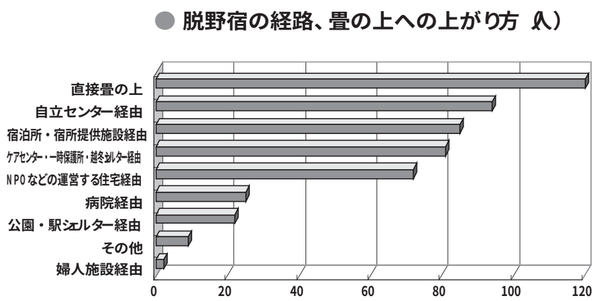
脱野宿後の就労経験は、四六％にのぼっています。

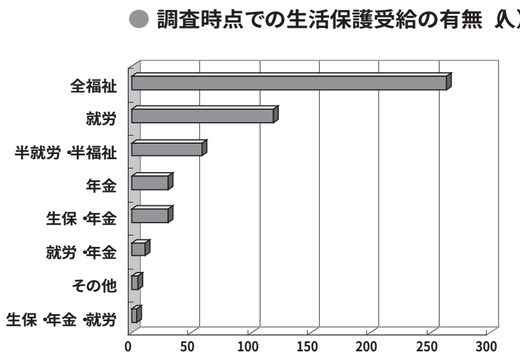
生活保護は、六九％の方が受給しています。

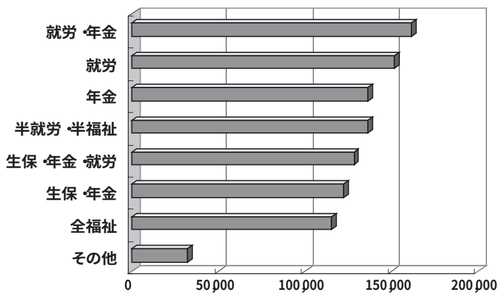
現在の状況ですが、一〇〇％生保の方が、四八％とほぼ半数。就労や年金と生保の組み合わせ二六％、年金のみが、六％、就労が二二％というような状況です。◆グラフ２

その月収も、一一万円から一五万円あたりとなっています。

◆グラフ３







ひとくちギャラリー

イラスト・詩・短歌など
なんでも投稿募集中！

高瀬君は、映画や音楽が好きで、僕らと話をするときは決まってその話になります。イラストを描くのも得意で、今号への投稿を希望したので掲載いたします。絵のタッチがすごく繊細です。（さ）